2. 篤農技術に育まれた野菜

「寺尾二年子ダイコン」の栽培は、丘陵地にある傾斜畑の微気象を考えた土地利用とこの地に適した品種育成並びに栽培管理を一体のものとして巧みに組み合わせた農民たちの努力で生み出された技術体系でした。技術の特徴は、①地域性や市場性を熟知した経営、②土壌と品種などの技術要素の体系化、③傾斜畑を有効利用する発想などの創造性、を上げることができます。

「覆下コカブ」は、相模川下流域の肥沃な土壌でビニールなどの保温資材のない時代に「よしず」を使って北風を防いで太陽光を取り入れ、冬期にコカブを出荷する技術でした。きめの細かい土壌で、きれいな肌のカブが採れました。現在は、ビニールフィルムを使ったトンネル栽培となっています。

イチゴはいまでこそ冬の果物になっていますが、露地栽培では晩春に収穫します。明治後期にいまの新宿御苑で福羽逸人は外国品種から「福羽」を育成しました。温室用の品種ですが、静岡県久能地方の傾斜地を使った「石垣栽培」に導入されました。玉石利用の石垣から、V字の切り込みの入ったコンクリート板による石垣が開発され、本県にも導入されました。玉石やコンクリート板を組み上げるには相当の労力が必要でした。本県では久能の傾斜地とは違って平坦地のため石垣の組み方にそれぞれの産地で工夫がされました。

このように、篤農技術は、知識と経験から生まれ、品種の特性を生かした栽培法は、今日の生産力発展の技術として定着し、貢献している技術です。



ダイコン 寺尾二年子ダイコン

一急傾斜地を開墾した先人の知恵とともに歩む―

横浜市鶴見区は市内で最も東京寄りの地区で、区の南部に京浜工業地帯をもち、内陸部は住宅が密集する都市地域、その西部に獅子ヶ谷地区とそれに隣接する北寺尾地区(現・北寺尾、上の宮)があります。

鶴見区西部は、「寺尾ダイコン」と呼ばれる秋ダイコンが1910年代から栽培が始まりましたが、その後1950年頃に発生したウイルス病により秋ダイコンは衰退し、代わって「寺尾二年子」による秋まき早春どりの春ダイコン産地として発展しました。

農家はこの春ダイコンを「寺尾二年子」または「寺尾時無」と呼んでおり、両者の違いは必ずしも明確ではありません。一般に、「二年子」は東京千住方面で発達し、「時無」は京都方面で発達した品種であり、ともに春ダイコンとして広く栽培されていました。「二年子」も「時無」も二年子群に分類され、「二年子」は秋に種まきし、春に収穫するため、年をまたぐという意味で二年という示し方、「時無」は他の品種では収穫できない春から夏にも収穫できること、すなわち一年中栽培できることを示しています。

三浦半島では「三浦ダイコン」は冬に主に京浜市場に出荷され、3月下旬以降はとう立ち(花茎が伸びること)のため品質が低下し、出荷できません。そこで、このダイコンの出荷の少ない時期(端境期)に出荷できる品種と栽培技術を確立したのが「寺尾二年子」でした。

1920年代に地元の育種家金井善三により神奈川区子安の「時無ダイコン」、磯子区磯子の「二年子ダイコン」などを取り入れて品種育成を試み、また、

金井清一は「二年子ダイコン」の品種改良を行い、 1935年頃に農水省種苗登録の「金井三交時無」を 育成しました。

一方で、金井善三らは冬期間の温度確保のための畑の開墾と改良にも取り組んできました。すなわち、南斜面の傾斜地は地温が上るため、冬でもビニールトンネルなしでも寒害を受けないメリットがあります。さらに、出来るだけ早く朝日を受けて地表の凍結時間を短くする工夫として、畑を小さな短冊形に区画し、各区画の地表面が南東方向に向くように傾斜を付けています。

そして、1950年代から60年代にかけてが春ダイコン産地としての最盛期で、作付け面積は約20%となりました。しかし、都市化の進展により1983(昭和58)年頃には販売農家18戸、栽培面積5%になり、2015年には販売農家1戸に衰退してしまいました。

品種の特性

当地の品種は、農家自身の自家採種により固定してきたもので、農家ごとにそれぞれ違った特性をもっていました。品種改良の目標は耐寒性が強く、とう立ちの遅い品種、低温肥大力に富む純白色で、肌のキメが細かく肉質がよいものでした。農家は、多くの観察、経験をもとに自分の耕地に適応したダイコンを得るために選抜淘汰を繰り返し、さらに様々な実験を行い、それらの結果について話し合い、互いに研鑽しながら

の栽培を行なっていたと言っています。

品種も収穫期の違いから「早生種」、「中生種」、「晩生種」と3系統育成され、根長が少しずつ異なりますが、外観はあまり差がなく、葉は濃緑色で小葉でした。根は細長で長さは約60cmで太いところの直径は5~6cmです。また、首元から次第に細そまって尖端が尖ります。根の色は白ですが、首元がやや淡緑色になります。キメはやや粗く、肉質は柔らかいものでした。春のとう立ちがダイコンの種類では最も遅いため、ダイコンの少ない春に収穫できます。

栽培の特徴

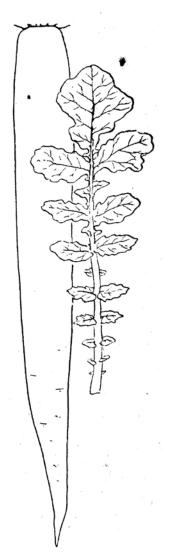
種まきは9月下旬~10月上旬、収穫は3月下旬~4月上旬が中心で、出荷期拡大のために4月中旬~5月出荷の栽培もされていました。端境期の出荷をねらって、農民だけの力で技術体系を創り出し

ていたのは、鶴見区の春ダイコン栽培の大きな特徴 です。

栽培技術上の特徴は、①長期間にわたる選択、淘汰によって新しい品種を育成、②冬期間の温度確保のために南面傾斜地利用が考案され、山林を開墾して傾斜畑を造成、③これらの品種と耕地条件を前提としたきめ細かい栽培管理技術、の3点を上げることができます。

栽培の状況

現在は2~3戸で自給的な栽培をしていますが、2009年に、上の宮の滝川昭治から種子を譲り受けた北寺尾の椎橋正治が約1~を栽培し、契約スーパーで販売したと頃、みずみずしく美味しいと評判でした。2016年には地域の伝統品種を普及するため、栽培面積を拡大しました。



▲「二年子」(「蔬菜園芸図編」より)







茅ヶ崎市の西部地域(中島、柳島他)は相模川 左岸の下流域に立地し、沖積植壌土ないし砂壌土 の肥沃で耕土が深く、また海に近く冬が温暖な地域 です。この地域のコカブ栽培は、大正初期から始ま り、1930~34(昭和5~9)年頃には麦稈防風立 てによる栽培(麦のうね間に栽培することで、風よ けになる)が行われ、1935年頃には一部の地域で は油障子の利用もされました。第2次大戦中は栽培 が中断し、戦後まもなく復興して、春まきの他、秋 ~晩秋まき栽培も行われました。その後、1955(昭 和30)年に西部地域の農家が、千葉県松戸市の覆下 栽培を視察し、早春のコカブの少ない季節に収穫で きるこの栽培法を導入しました。晩秋まき栽培(10 月下旬~11月中旬まき)は1963年にはおよそ約 70戸、17 鈴栽培され、うち 14 鈴 がこの覆下栽培 でした。

覆下栽培の特徴

覆下栽培は、栽培床の北側にヨシズを立てることにより、降霜や冷たい北風を防ぎ、生育の促進と品質向上を図る方法です。東西方向の140~150cmの栽培床に条間10cmの種まきの溝を13条作ります。種まき後、肌荒れ防止と陽熱吸収のために海砂

を6~9mm掛けて鎮圧します。その後、支柱となる丸太、ヨシズを支える横竹等で合掌式に骨組みをつくり、幅1.8mのヨシズで北面を覆います。このヨシズの立てかけ角度は、真冬日中の光が床面の奥まで入る角度にし、1月から2月にかけて太陽高度が上がってくるに従い、角度を上げていきます。

覆下栽培からトンネル栽培へ

1965 (昭和 40) 年頃から、海砂の採取は海岸保全のために規制され、地元での入手は困難となり、一時は他県から購入する時期もありました。覆下の資材は、ヨシズと丸太で 40~50万円/10元を要し、覆下の設置、角度の調整、取り外しに多くの労力がかかることに問題がありました。当時はビニールフィルムが普及し始めていましたが、日中の高温による葉焼け、夜間の凍害で品質のよいものが得られませんでした。

1975 (昭和50) 年頃に穴あきのビニールフィルム (商品名:パンチフィルム) が導入され、この資材を 使ったトンネル栽培は換気がよくて高低温の障害が 少ないことから、覆下栽培に代わり、急速に面積が 拡大しました。1982年に約30%のうち、覆下栽培約13%、トンネル栽培約17%となっていました。

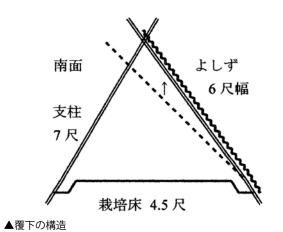
次に、1985 年頃からトンネル資材に換気性のPVA(ポッパニルがルール)フィルム(商品名:ベルツーキ、現在名はベタロン)が導入され、日中の昇温効果は小さいが、換気作業が不要なこと、雨水が適度に浸透して土壌が乾燥しないことのため、コカブの生育・品質に大きな効果が得られました。

品種の特性

覆下栽培の導入時は、金町小カブの早生系(染谷系など)で、草丈が短い割に、根部が肥大し、耐寒性の強い系統でした。1970年には覆下栽培では「理想覆下」が主力となり、トンネル栽培では「たかね」が中心となりました。これらの品種は、玉が白く、肌がきめ細かくて歯ごたえがよく、評判の品種でした。

1988 (昭和 63) 年には「白鷹」、「しらふゆ」が主力品種となり、2002 (平成 14) 年には「白鷹」、「CR 白涼」が多く、いずれも球形は腰高で低温下でも球と葉の伸びがよく、球と葉のバランスのとれた品種です。「CR」とは、アブラナ科野菜になりやすい根こぶ病の抵抗性がある品種のことです。連作が続くと、この病気になりやすいので、抵抗性の品種を使うことが多くなりました。

最近は、各農家で好みの品種を作るようになり、 地域で統一した品種はありません。



栽培の特徴

現在は、トンネル栽培ではまき床幅 140cm 程度、 株間 $12 \sim 15$ cm、通路 50cm にし、種まき器を利 用して間引きをなくすために、1 ケ所 1 粒まきにし ます。収穫は根の直径 5cm 程度で一斉に収穫します。

栽培の状況

本県では最も多い作付け面積は、1967(昭和42)年に341%、うち横浜市190%でしたが、その後茅ヶ崎市では1987年前後に35~36%となり、2008(平成20)年には118%(うち、横浜市35%、茅ヶ崎市25%)と、作付け面積が漸減傾向です。最近は統計データがないため、推測値ですが茅ヶ崎市では約10%と思われます。

中島の専業農家 清水昇は主にダイコン、ニンジン、コカブを栽培し、コカブは年間 2.5%です。出荷量は 10~当たり 5000~6000 東(1 東3~7個)、最盛期には 2000 東で、主な出荷先の横浜の市場では、茅ヶ崎ブランドとして人気の野菜となっています。

▼カブの出荷調製(1982 年)



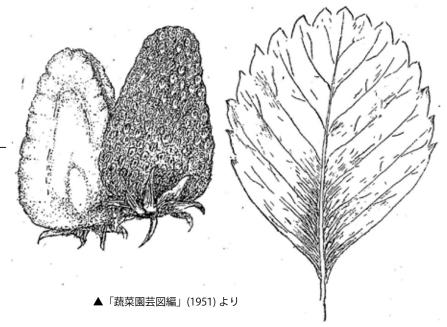
▼ TVK の取材(1965 年頃)



イチゴ 福羽

一石垣イチゴの

盛衰と共に歩む一



イチゴは江戸時代末期にオランダから長崎に伝えられました。国内のイチゴ栽培は1898(明治31)年に新宿御苑で福羽逸人がフランスから品種「ゼネラル・シャンジー」の種子を取り寄せ、それを元にして、1905年に「福羽」を育成し、苑内の温室で促成栽培を始めました。

その後、静岡県で温暖な土地の久能地区において石垣栽培が考案され、早春に収穫されて、全国的に有名になりました。石垣栽培は、久能では海岸で採集した玉石を石垣状に積み上げ、石の隙間にイチゴを植える方法です。1923年にはコンクリート板による石垣栽培が考案され、コンクリート板を傾斜地に階段状に仕切っていく栽培に代わっていきました。

本県では 1909 年頃に小田原の辻村農園で、1919年には藤沢の大矢好治が湘南花園で「福羽」を使ったフレーム栽培を始めています。このフレーム栽培は、1930年にコンクリート板による石垣栽培が導入されるまで行われました。

1923年に赤羽根園芸試作場(茅ヶ崎町、藤沢町、 小出村、寒川村の4カ町村立)で甲賀春吉は湘南花 園から入手した「福羽」の展示栽培を行いました。 この栽培をみた寒川村の脇隆三郎は1927年に試作 場から数十株の親株を譲り受け、栽培を始めました。 これが、寒川における産地形成の第一歩です。

県内では、三浦半島で 1915 年頃に三浦郡西浦村 (現・横須賀市大楠町) の新倉福松による露地イチ ゴの記録がありますが、三浦郡久里浜村(現・横須 賀市久里浜町)で1925年に地元農会主催の福羽イチゴ栽培座談会が開かれ、これを受けて、長島清蔵らがフレーム栽培を開始しています。1926年には出荷組合が結成され、汽船便で東京・神田の竹屋商店(現・サンフルーツ)に出荷されていました。

高座郡有馬村と海老名村(いずれも現・海老名市)では1931年頃から水田地域に石垣栽培が急速に普及し、とくに1939年には有馬村では総勢248名からなる「有馬村温室苺組合連合会」による大産地が形成されていました。

中郡では、神田村、大野村(いずれも現・平塚市)および相川村(現・厚木市戸田)は相模川を挟んで寒川、有馬の土質と経営条件が似ているためイチゴ栽培に適しており、1931年に苗が導入されて、1933年には甲温室苺組合が約30名の規模になっていました。

一方、足柄上郡と下郡では、1931年に20名で 吉田島陽熱苺組合が結成され、1933年には近隣の 町村に普及して、44名の規模になりました。

しかし、1937年に日中戦争と、続く太平洋戦争 と戦火が拡大するにつれ、生産資材の配給割当て、 作付け統制などがあり、1941年に遂に栽培が禁止 されました。

戦後は 1946 年に寒川の脇隆三郎らが「福羽」の 石垣栽培を再開させ、翌年に 20 名をもって寒川い ちご組合が再結成されています。従来の産地でもい ちご組合が再興し、座間市、秦野市、横須賀市に新 産地が続々誕生しました。 イチゴの消費は、1960年から始まる高度経済成長に伴って急速に増加しました。関東近県ではこれに合わせるかのように栃木県、群馬県、千葉県などで大産地が形成されていきました。これら新興産地では、導入段階で本県に頻繁に視察に訪れ、農業改良普及員の研修で、石垣栽培の実地研修をするなど技術習得に熱心でした。その後、栃木県、埼玉県などでは「福羽」の石垣栽培を基に、地域条件に適合した新品種「ダナー」のトンネルまたはハウス栽培を確立して、1960年代後半には全国規模の大産地に発展していきました。

促成栽培用の品種は戦前から「福羽」が主流で、これに勝る品種はありませんでした。しかし、1950年にアメリカから「ダナー」が導入され、その後は当分の間「ダナー」が主要品種でした。1954年には「福羽」を素材にした「堀田ワンダー」の育成を皮切りに、「宝交早生」「春香」「麗紅」「女峰」と相次いで新品種が登場しました。

本県では、1969年に「春香」、1971年に「宝交早生」、1979年に「麗紅」、1986年に「女峰」が本格栽培され、これにより「福羽」は1977年には消滅してしまいした。

「福羽」は新宿御苑で育成されてから約80年、 産地化されて50年以上の長命な品種でした。

品種「福羽」の特性

葉は短楕円で周縁の鋸歯は中位でやや深く、葉柄は長くはありません。果実は長円錐形で大きいものは 7.5cm 位に伸び、横径は 4.5cm にもなります。多少扁平で厚さが横に比して狭く、先端は鈍尖となりますが、中には扁平に近いものも相当多い。1個の重量は 37g ~ 56g のものは普通で、大きなものでは 75g にも達します。果色は鮮紅色で光沢があり、果肉も紅色で空洞が少ない。

これは日本で育成された最初の品種で世界に誇る 品種となります。当初は門外不出(皇室用のみ)と され御苑イチゴ、御料イチゴなどと呼ばれ、およそ 庶民には手の届かない存在でした。最近の新品種は 「福羽」の血統が多く、これがイチゴ消費拡大につ ながりました。

栽培の状況

現在のイチゴ生産は、海老名市、秦野市、平塚市、 小田原市、伊勢原市、厚木市、横須賀市などを中心 に、栽培面積 51%、収穫量 1,180^ト/_> (2014 年) が 生産されています。



▲足柄下郡の「石垣イチゴの栽培風景 (1953年)